Amadeus Chorus

3rd CONCERT

'82 November

Tokyo Kathedral

アマデウス合唱団 第3回定期演奏会

FAURÉ REQUIEM

ご挨拶

本日の御来場に厚くお礼申し上げます。

創立以来、皆様の暖かいご支援を賜り、合唱音楽の真髄を求め続けて３年目を迎えました。この度、第３回目の定期演奏会を催すにあたり、指揮者、ソリスト、オーケストラ、それぞれ一流の方々のご協力を頂くことが出来ました。私共にとっては望外の幸せでございます。この日、この素晴しい会場で、日頃の成果を存分に発揮する所存でございます。どうぞ今後とも、皆様の変らぬご支援とご指導を仰ぎたくお願い申し上げます。

アマデウス合唱団団長　橋本　克久

演奏者プロフィール

黒岩　英臣〈指揮・II〉
Hideomi Kuroiwa

1960年、桐朋学園大学指揮科入学、故斎藤英雄氏に師事。1964年、同大学弦楽オーケストラのアメリカ公演に指揮者として同行、ニューヨーク、ロサンゼルス、サンフランシスコ等で指揮した。1965年同大学卒業、ＮＨＫテレビ「今年のホープ」に出演。同年修道士となり、1975年まで修道生活を送った。

1976年より再び音楽に専念。札幌交響楽団、名古屋フィルハーモニー交響楽団、九州交響楽団の定期演奏会をはじめ、東京の主要オーケストラとの共演も数多く行なっており、今後の活躍が期待されている。

砂田　直規〈バリトン〉
Naoki Sunada

信州大学卒業。東京芸術大学大学院修了。東京混声合唱団在団中には内外著名指揮者のもとでソリストとして活躍。オペラ「修善寺物語」「唐人お吉」「椿姫」「ランメルムーアのルチア」「ラ・ボエーム」等多くのオペラや、ミサ曲。カンタータ等数々のコンサートにも出演。また来年３月３日の「袈沙と盛遠」のタイトルロールに出演が決っている。

大志万　明子〈ソプラノ〉
Meiko Oshima

東京芸術大学卒業。同大学大学院オペラ科修了。「天守物語」「ジャンニ・スキッキ」「ヘンゼルとグレーテル」「コシ・ファン・トゥッテ」「魔法の酒」「沖縄物語」等のオペラに出演。ＮＨＫ・ＥＭ〈音楽の贈り物〉などの放送コンサートにも多く出演。子供の歌のレコードもある。二期会準会員。日本オペラ協会会員。

鈴木　優〈指揮・I〉
Masaru Suzuki

今年東京芸術大学を卒業し、東京混声合唱団に入団する。1981年より、当合唱団の合唱指導を務めている。

東京アマデウス管弦楽団
Tokyo Amadeus Orchester

1973年、指揮者玉置勝彦氏の門下生とその友人達で結成された。これまでモーツァルト、シューベルト、ブラームス、ブルックナーの交響曲等を中心として、年２回の定期演奏会のほか、協奏曲や合唱曲の伴奏、音楽教室を対象とした演奏など、多彩な活動を行なっている。ほかにもシンガポールの演奏旅行、静岡県オペラ協会の「椿姫」などで好評をはくした。去る10月31日に第20回記念として、ベートーヴェンの交響曲第９番を演奏している。

PART I

指揮／鈴木 優

ショスカン・デ・プレ：アヴェ マリア
Josquin des Prés (1440～1521 France) AVE MARIA

トマス・ルイス・デ・ヴィクトリア：永遠の奇蹟よ
Tomás Luis de Victoria (1548～1611 Spain) O MAGNUM MYSTERIUM

ウィリアム・バード：アヴェ ヴェルム コルプス
Wiriam Bird (1543～1623 English) AVE VERM CORPUS

ハインリヒ・シュッツ：神に向かい新しき歌を歌え
Heinrich Schutz (1585～1672 Jarmany) CANTATE DOMINO CANTICUM NOVUM

ヨハネス・ブラームス：何故に光が、悩み苦しむ人に与えられたのか
Johannes Brahms (1833～1897 Jarmany) WARUM IST DAS LICHT GEGEBEN DEN MÜHSELIGN

本日の第１ステージで演奏されるのは、いずれも人間の声のみによって歌われる無伴奏の合唱曲です。はじめの三曲はルネッサンス期の、それぞれフランドル（現在の北フランス・ベルギーにあたる地域）・スペイン・イギリスの時代を代表する巨匠たちの手による作品です。この時代には、それぞれのパートが横に独立して動きながら、お互が積み重なってからみ合っていくポリフォニーという様式が高度に発達し、合唱音楽が最も重要視された音楽のジャンルであったようです。

ルネッサンス期の音楽はやはり、ヴァン・アイクやレオナルド・ダ・ヴィンチといった同時代の美術とも共通する、非常に調和のとれた穏やかさの中に、美を形成するのに不可欠である強靱な筋金が通っていると言えるでしょう。

４曲目はドイツ初期バロックの作曲家ハインリッヒ・シュッツの作品で、1625年に出版された四声部のための40曲からなるカンツィオーネス・サクレの中の曲です。シュッツはバッハのちょうど 100 年前に生まれ、ドイツが非常に大きな痛手を受けた30年戦争の中を生き抜いたわけですが、当時は音楽的には後進国であったドイツにあって、真のドイツ的音楽語法を確立した人といえるでしょう。現代でも“シュッツこそがバッハに先立つドイツ音楽の父である”と評価されています。

そして前半のステージ最後は、19世紀ドイツ・ロマン派のブラームスの作品です。ここで注目すべきは、かなり時代の下った作曲家でも宗教音楽の作曲はかなり伝統的なスタイルを意識しているという事であります。この曲でも厳格なポリフォニーによる構成や、終結部でのバッハ的なブロック・ハーモニーによるコラール（プロテスタントの讃美歌）の使用が目立つところです。しかしながら、そういった保守的な様式を用いながらもやはり、交響曲などで耳なれたブラームス独自の音響の世界はここでもゆるぎなく存在しています。

さて、一般的な傾向として時代の流れと共に人々は音楽に対して、より強い精神的緊張やより大きな刺激を要求するようになってきている。例えば現代の楽器の標準的なピッチはバッハ時代に比べて半音、そして17世紀フランスに比べて実に長２度高くなってきている。また協和音不協和音という概念にしても過去に於いては５度と８度のみを完全協和音程としていた時代もあったのに、現代人の耳には長７度を含む和音が実に耳に快く響く。バロック時代に於いて声楽の時代から器楽の時代への転換があり、楽器にしても穏やかな音色の楽器よりも音量の大きいものや機械的なものがより一般的となってきている。こういった諸々の傾向は現代では加速度的に強まっているといえるだろう。電気によって増幅される無機的な音はＢＧＭの名の下に巷に無秩序に氾濫しているし、電車に乗れば周囲の人にも聞こえるような音量でウォークマンを聴いている人をよく見かけるわけです。本来人間の奥深い精神の所産であったはずの音楽が今や人間の精神状態を圧迫したり生理機能を犯すようなものにもなろうとしている。勿論音楽は時代を投影していないわけがないのですが、果して、こういった現代の音世界になじんだ耳には、本日演奏される時代を超えて歌い継がれてきた合唱曲はどのように受け取られるのだろうか。

PART II

指揮／黒岩 英臣

バリトン／砂田 直規　ソプラノ／大志万 明子　管弦楽／東京アマデウス管弦楽団

ガブリエル・フォーレ／レクイエム op 48

Gabriel Urban Fauré (1845～1924 France) REQUIEM

入祭唱とキリエ　*Introitus・Kyrie*
奉献唱　*Offertorium*
聖なるかな　*Sanctus*
ああイエズスよ　*Pie Jesu*
神の小羊　*Agnus Dei*
我を許したまえ　*Libera Me*
天国にて　*In Paradisum*

フォーレは1845年、南フランスの小都市パミエで小学校校長の末子として生まれた。彼は32才の1887年より、パリの聖マドレーヌ聖堂のオルガニスト兼合唱長を約20年間務めている。父親の死をきっかけとして作曲されたといわれるこのレクイエムは1888年、同聖堂で初演された。一切の誇張を排し、抑制された表現の中にフォーレ独特の美しい響きと調和が見い出される。

Ⅰ．入祭唱とキリエ（Introitus. kyrie）

四部合唱。死者の安息を祈り、主とキリストに憐れみを求める。管弦楽の荘重な導入部、そしてあたかも読経のように合唱が入祭唱を歌い出す。テノールが「永遠の休息を…」と祈り、それをソプラノが「神よ、主への称讃をふさわしく歌うのはシオンにおいてである」とうけつぐ。最後に再び四部合唱が「主よ憐れみ給え」と歌う。

Ⅱ．奉献唱（Offertorium）

バリトン独唱と四部合唱。神に讃美の犠牲を捧げ、死者を罪と地獄からまぬがれさせ給えと祈る。まず弦楽とオルガンとで導入部が奏され、続いてアルトとテノールがカノンの美しい旋律を無伴奏で歌う。中間部はバリトン独唱による「ホスティアス」。冒頭の部分が四声で再現され、抒情的な動きの中で「アーメン」が唱えられる。

Ⅲ．聖なるかな（Sanctus）

四部合唱。神への讃美。ハープ、ヴィオラの分散和音の上にソプラノが「サンクトゥス」と歌い始めると、それに応えるようにバス、テノールがユニゾンで交唱風に歌っていく。ヴァイオリンの対旋律がそれに美しくからみつく。

Ⅳ．おおイエズスよ（Pie Jesu）

ソプラノ独唱。主イエスに死者の安息を祈る。弦楽による短い間奏を持つ小さな曲である。ソプラノの歌う旋律もごく簡素なものだが、その単純さの中にも敬虔な祈りが感じられる。

Ⅴ．神の小羊（Agnus Dei）

四部合唱。神の小羊たるキリストに捧げる祈り。弦とオルガンの序奏に続いてテノールが歌い、四声の合唱による力強い「アニュス・デイ」がこれに続く。そしてテノールの合唱がくり返されたあと、ソプラノの「Lux――」に導かれ合唱となる。四部合唱のあと、第Ⅰ曲「レクイエム」の冒頭の部分が再現され、最後は弦とオルガンによる曲の序奏と同じ旋律の後奏で結ばれる。

Ⅵ　我を許したまえ（Libera Me）

バリトン独唱と四部合唱。死者の罪の許しを祈願する。抵弦とオルガンが刻む不安なリズムの上に、バリトンが感動的な旋律を歌い出し、これを合唱の「我はおそれおののく」がうけつぐ。すると最後の審判のラッパが鳴り響き、四声がffで「その日こそは怒りの日」と最後の審判の情景を歌う。最後は冒頭のリズムに戻り、バリトン独唱の旋律を合唱がユニゾンでくり返す。

Ⅶ．天国にて（In Paradisum）

四部合唱。オルガンが奏する分散和音の澄んだ響きにのって、ソプラノが柔らかく透明な旋律を歌う。途中「エルサレム」と歌われる部分で男声部とアルトが加わり高まりを見せるが、再びソプラノの合唱となり、最後は四声による安息の祈りで結ばれる。

Amadeus Chorus

3rd Concert '82 November Tokyo Kathedral

1981 February **Mozart : REQUIEM**
1981 November **Händel : MESSIAH**

アマデウス合唱団は、'80年４月に結成され、'81年２月15日、上野石橋メモリアルホールにてW・A・モーツァルトのレクイエム、同年11月１日、中央会館大ホールにてG・F・ヘンデルのメサイアの２回の演奏会を行ない、今日に至っております。

過去の演奏会では、未熟ながらも熱気あふれる演奏と評されました。以来１年余、団員一同“未熟ながらも”という甘えを排し、音楽への情熱に裏付けられた“熱気”を燃えたたせて研讃に励んでまいりました。

現在団員は約60名。毎週火曜の練習、月１回の日曜練習さらに年２回の合宿と、そこでの団員間の親睦を通して、16才～70才という年令構成、様々な職業 etc のバラエティーに富んだ声を一つにして、より良い音楽、そして私達の個性を活かしたアマデウス合唱団ならではの音楽をめざしています。

当団の歴史は未だ始ったばかりで、取り組むべき課題は山ほどありますが、上記の理想に一歩でも近づくべく、“疾走”していきたいと思っております。

SOPRANO		ALTO	TENOR	BASS
天野久美子	鍋谷　枝里	石川　満美	伊原　　宏	伊藤　　通
石橋　真澄	林　理恵子	伊藤　正子	入田　丈司	黒後　智彦
江川　智子	福島喜久子	井上やす子	大久保　訓	佐藤　　聡
大久保ルミ子	星名佳代子	大岩　幸子	河合　敏夫	下条　　毅
金子かおる	渡部　恭子	加藤　優子	郷原　信親	管原　定三
金子　　栄	渡辺　博子	佐藤　敏子	小島　文男	寺島　　治
窪田　玲子		地引由佳里	鈴木　俊二	濱田　一憲
小島　順子		高橋くるみ	関　　実	橋本　克久
真造　順子		高橋　早苗	釣井　博之	樋口　正文
鈴木　直子		武田　州代	野口　　碩	山崎　和英
嵩山　雅子		服部マサ子	林　喜與志	山崎　大介
武田　真穂		矢島美知子	三浦　恭裕	山谷　浩之
谷口真由美		鶴田　敏子	山崎　　厚	

1982. Nov.

Amadeus Chorus

3rd Concert '82 November Tokyo Kathedral